

三重県上野市

下郡遺跡第三・四次発掘調査概報

—木津川河川敷—

1982.3

三重県教育委員会

- ◇ スキャンニングによるデータ取り込みのため
若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

- ◇ 昭和 57(1982) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 16(2004) 年 12 月にデジタル化しました。

I はじめに

一級河川木津川（旧長田川）は青山高原に源を発し、上野盆地南部の水をあつめ、北流して柘植川、服部川を合流して京都府に下り淀川として大阪湾に注いでいる。

この木津川は、上野市下郡付近では川幅が約70mと狭く、洪水時には多くの被害を出してきた。そこで、この地区の木津川左岸の拡幅及びこれに伴う集団移転事業が、昭和46年頃から計画されてきた。

一方、この地区は下郡遺跡（第1図の1、県遺跡番号3143）として登録されている周知の遺跡である。これは複合遺跡であるために、その範囲は下郡地区全域に及んでいる。

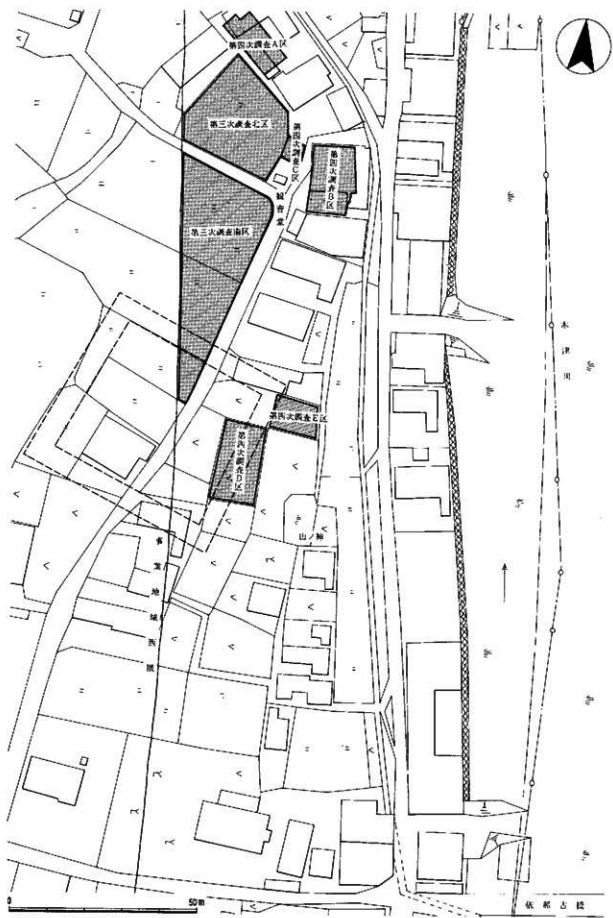
昭和52年以来、県土木部、県教育委員会、上野市、市教育委員会、地元との間で協議を重ね、^①集団移転地では下郡遺跡調査会等による発掘調査も行われた。

一方、本川部分については、既買取地を対象に遺跡の範囲及び遺構の保存状況をみるための試掘調査を県土木部からの執行委任を受けて、県教育委員会が実施することとなった。

そこで三重県教育委員会は、昭和53年度と54年度において第一次、第二次の試掘調査を実施し、



第1図 遺跡位置図(1:50,000)



河川改修事業地内における埋蔵文化財の範囲確認に努めた^②。この結果、「観音堂」と呼ばれる板碑を祀る祠付近と「山ノ神」付近は、面的な発掘調査を行う必要があると判断された。

この結果を受けて、第三次調査を昭和55年10～12月に、第四次調査を昭和56年10月～57年2月に実施した。当報告は、この2年度に及ぶ発掘調査の概要をまとめたものである。

なお調査にあたっては、地元地区の方々に多大な御協力を得た。また、上野市教育委員会や下郡市民館、三重県土木部木津川改修工事事務所にも種々御配慮頂いた。記して謝したい。

II 位置と環境

上野盆地を北流する木津川は、古くから幾多の蛇行を繰り返して来たが、今日ではかなり直線的な流れに改修されている。しかし、流域の沖積地には蛇行の痕跡がかなり明瞭に残っており、改修前の流路を彷彿とさせる。例えば、才良を過ぎた木津川は大きく東に蛇行して現在の沖の集落を流れ、依那古小学校付近に自然堤防を残している。ところが、江戸時代に入ってから現在のように近鉄伊賀線依那古駅の西に、直線的な河道が新設された^③。しかし、直線的になった反面、川幅が狭く河床も高いために、その後も多くの水害を出してきた。

下郡遺跡(1)は、縄文時代や弥生時代の遺物も出土するが、遺構は明らかではない。

古墳時代の竪穴住居が、下郡遺跡調査会の発掘調査によって2地点で確認されている。この内、前期の2棟は微高地の北西端に、後期の数棟は微高地の北端に位置する。断片的な遺物は微高地全域に散在するが、竪穴住居は縁辺部のみ認められている点は興味深い。すなわち、微高地上は土地生産性の高い乾田であるが、耕地化するには大規模な用水工事が前提条件となり、この段階ではまだ充分な活用はなされず、いきおい低湿地に依存する割合が強かったものと考えられる。

飛鳥・奈良時代の遺構や遺物も各地点で認められるが、北半部に目立つ。

延暦年間(782～806)には、「イダ」神社が勧請されたとされるが、この延暦の記年銘のある木簡が、やはり調査会の発掘時に井戸から出土し、緑釉陶器や志摩式製塩土器も認められた。この地区は、「郡」の付く地名から伊賀郡衝と古くから推定されていたが、発掘調査によってその可能性が充分にある事が明らかになった。

中世になると、当報告で東区と呼ぶ微高地より下の旧氾濫原にも遺物が見られるようになる。

一方、微高地上には城館が3ヶ所に認められる。また、観音堂の板碑等のような貴重な石造遺物も建てられている^④。

周辺には弥生時代の森寺遺跡(7)や才良遺跡(13)、猪田神社古墳群(5)、白鳳の才良廃寺(12)、円面碗を出土した波岸台遺跡(3)、黒色土器や転用碗を出土した唐木谷遺跡(4)、式内社である猪田神社や猪田経塚(6)、重要文化財の薬師如来像を安宿する長隆寺等極めて豊富な文化遺産が存在し、下郡周辺は伊賀においても屈指の歴史的環境を保っている。



第三次調査北区全景 (NW→)

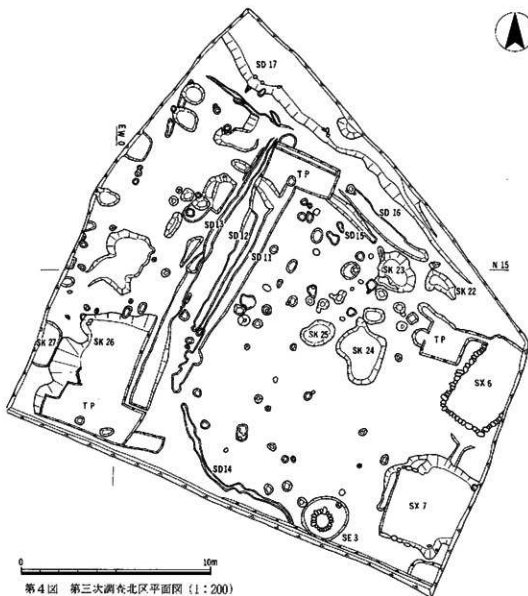


第三次調査北区 SX612か (NEN→)

III 遺 構

1. 第三次調査北区

観音堂から西に延びる道に北接する水田を北区と呼ぶ。道の南側よりも約1m低く、本津川本流に向けて北方や東方に緩く傾斜している。



第4図 第三次調査北区平面図(1:200)

主要な遺構としては、中世後期から近世初期に属す、井戸（SE3）や池状の石積み遺構（SX6～7）、および多くの溝（SD11～17）や土壇（SK22～27）等がある。

SE3は、丸太を井桁に組んで柵とし、この上に川原石を乱石積みにしたものである。井戸の内法は中位を最大とし、上半部は漸次円形に変わり、径も小さくなる。

SX6は、約4.6m×約2.5mを測る長方形の石積み土壇である。性格は不明であるが、SX7も同様なものと考えられる。

SK22は石組みの小土壇であり、天目茶碗が出土した。

このほかにも、多くの土壇や溝と柱穴らしい小穴もあるが、建物としてのまともは認められなかった。

なお、この地区には整地土が認められたが、遺構はこの上面で検出された。



SX6 (ESE→)



SD13 (SES→)



SD15 · 16 (NW→)



SK22 (SWS→)



SK25 (NWN→)

2. 第三次調査南区

観音堂から西と南に延びる道と事業地西限に挟まれた、調査区中最も高所に位置する三角形の水田部分である。

主要な遺構としては、掘立柱建物(SB1)や掘立柱列(SA2)、井戸(SE4)、大溝(SD20)等がある。これらは、やはり中世後期から近世初期に属す。

SB1は、南北にやや長い3間×3間の側柱のみで構成される掘立柱建物である。しかし、不明な柱穴も多く検討を要する。

SA2は、SB1の南面に並ぶ柱列である。3間分確認されたが、柱筋もSB1と一致するらしく、SB1と併せて検討する必要がある。

SE4は崩壊が著しく、完掘できなかったが、SE3と基本構造は同一と考えられる。

SX8は、SD20の埋没後に造られた、池状の石積み遺構である。

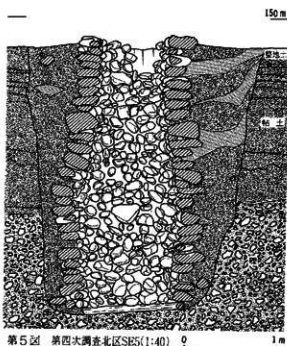
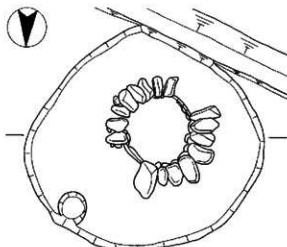
SD18は、幅3.5～5m程、深さ0.6m程の浅い南北溝であり、調査区北端で開口する。

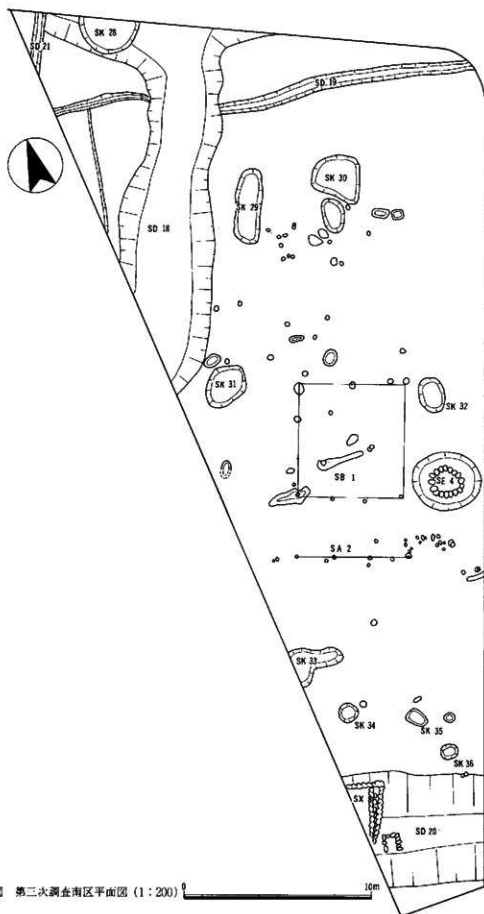
SK28からは、近世末頃の染付茶碗等が多数出土した。

SD20は、調査区南端で検出された幅約6m、深さ約1.6mの東西大溝である。断面形は箱葉形堀であるが、両肩下に緩傾斜部を持つ。埋土は、上層の酸化層と下層の還元層とに大別される。下層からは、鋼製の鋸(1)、タガネ(2)、錠前(3)や柱格不明品と曲物が、多くの自然木と共に出土した。

なお、第四次調査D区で検出された、南北大溝(第8図、9図下)も、SD20と同一遺構と推定され、同じくSD20と呼ぶ。同一遺構と判断した理由は、規模や形態、埋土の性質と出土遺物の類似性、および溝底部と埋土下層である還元層上面の絶対高の近似による。

この南北と東西に延びるSD20は、伊賀の中世城館の堀と何の違っても見られない。そこで、周辺地形を検討すると、既に検出した部分を北と東の堀とする。中世城館跡(第3図破線部)が推定可能である。





第6图 第三次调查南区平面图 (1:200)



第三次調査南区全景 (SES→)



第三次調査南区全景 (WNW→)



第三次調査南区SD20 (SES→)



第三次調査南区SD20 (WSW→)



第三次調査南区SD20 鍔(1)出土状況



第三次調査南区SD20 鍔前(3)・性格不明鉄製品出土状況



SE3 断ち割り状況 (N→)



SD18 (SWS→)

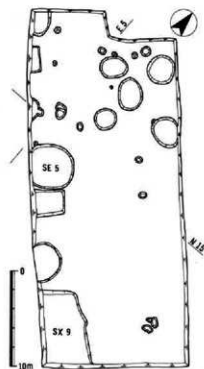
3. 第四次調査A区

第三次調査北区に北接する地点である。

主要な遺構には、井戸（SE5）と池状の石積遺構（SX9）があり、中世後期以降の所産と考えられる。また、このほかにも土壇が散在する。

SE5は、やはりSE3と同様に、井桁に組んだ丸太を框として、この上に川原石を乱石積みしたものである。上方に向かって方形から円形プランに変る点もSE3と同様である。

SX9は、調査区南隅で検出されたために不明部分もあるが、SX6～8と同様な性格の遺構と考えられる。



第7図 第四次調査A区平面図（1：200）

4. 第四次調査B区

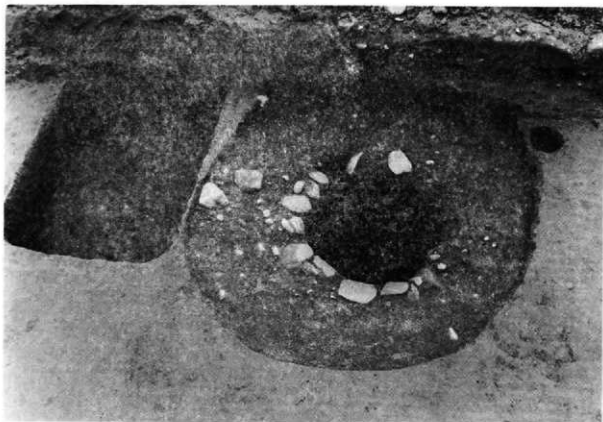
観音堂に東接する調査区であり、地山である砂質土は東方の木津川本流に向けて緩く傾斜する。

遺構は少なく、不定形な石組遺構（SX10）と、浅い井戸状遺構（SK37）、椽瓦を肩部に巡らした土壇（SK38）が存在するのみである。

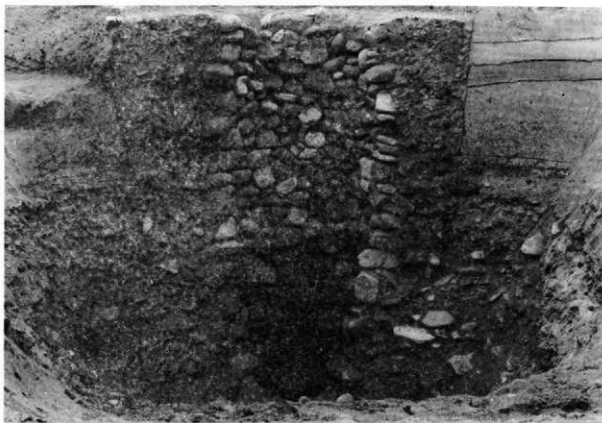
これらの遺構は、近世初頭以降に属すると考えられる。



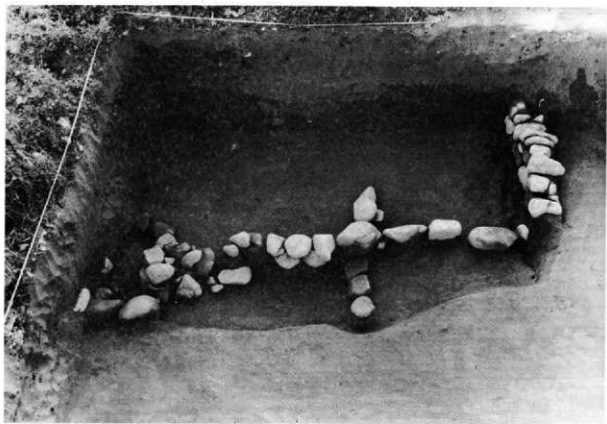
第四次調査A区全景



SE5 (NE→)



SE5 断ち割り状況 (NE→)



SX 9 (NE→)

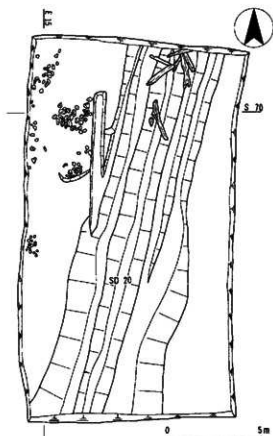


第四次調査B区全景 (N→)

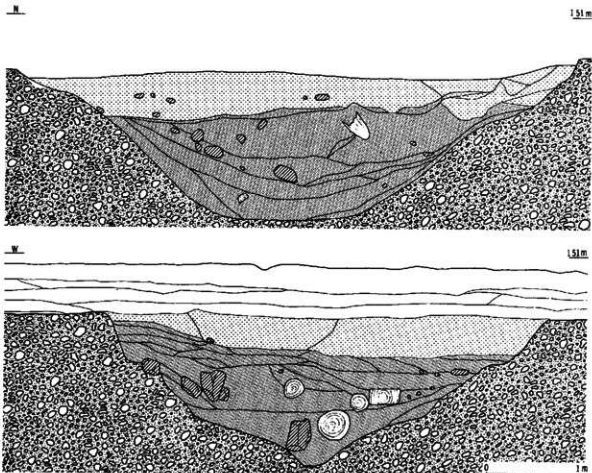
5. 第四次調査D区

観音堂の南方約70m、山ノ神の北西にあたる畑地である。地表下約50cmで既述のSD20が検出されたほか、顕著な遺構は存在しない。

SD20は、南北約20m検出されたが、磁北より北で東に約15度振れている。規模は、幅5～7m、深さ1.6m程である。断面形は築研堀に近く、両側の肩部下に緩傾斜部を持つ。埋土は上層が酸化層であり、下層は還元層である。下層からは自然木と共に、建築部材かと思われる加工木が出土した。既述のとおり、第三次調査南区の南端で検出された東西の大溝と一連の遺構と考えられ、中世城館の堀と推定される。中世城館の堀であるならば、この南北大溝の西側の地山直上層は土塁の基底部の可能性もある。



第8図 第四次調査D区平面図 (1:200)

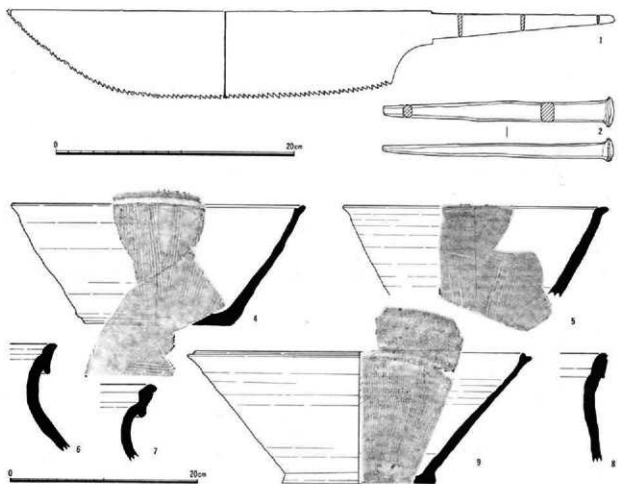


第9図 SD20土層図 (1:40)

上: 第三次調査南区東壁、下: 第四次調査D区北壁



第四次調査D区全景 (SWS→)



第10図 遺物実測図(1~3:ㄨ、4~9:ㄨ)

IV 遺物

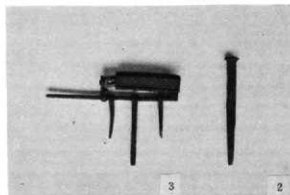
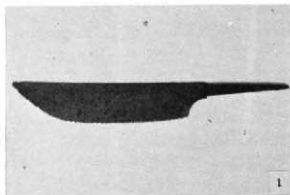
出土遺物は、各地点共中世後期を中心とし、近世初期までの陶器類が多いが、少量ながら弥生時代後期から近世末までの遺物もある。

注目される遺物としては、鋸(1)やタガネ(2)、錠前(3)等の鉄製品と、垂木等らしい加工木(10)がある。これらはSD20出土品であり、15~16世紀に属すと推定される。

鋸は「木葉型」を呈し、アサリを持つ。

錠前は出土時は施錠されていたが、現代の農家の蔵で使用されている鍵で開錠した。

なお、第三次調査北区では天目茶碗が多く、完形品も出土した。また同地区からは、2行に分けた「大明年製」銘の染付碗も出土した。



今も使用可能な錠前と使い古されたタガネ



SD20出土材に突き刺った鉄釘?



抉りと2孔を持つ垂木らしい加工木

V おわりに

以上、昭和55年度(第三次)と56年度(第四次)の2年度に及ぶ発掘調査の概要を記した。

この結果、試掘調査(第一・第二次)では想定できなかった中世城館が推定されるに至った。

また、中世後期の鋸としてはおそらく唯一の完形品の出土を見る等、多くの成果を得た。

(山田 猛)

註

- ① 中森英夫・山田猛・山本雅晴「下部遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会・上野市下部遺跡調査会 1978
- ② 山田猛「下部遺跡調査概報」三重県教育委員会 1979
山田猛「下部遺跡第二次試掘調査概報」三重県教育委員会 1980
- ③ 『沖村地誌』明治年間
- ④ 藤堂元甫『三国地誌』1763
- ⑤ 太田古幹『仏像と五十年』I 1979